

平成 19 年度

職業和裁技能検定

学科模擬試験試験問題集

(2 級)

愛知和服裁縫業協同組合

社団
法人 日本和裁士会愛知県支部

職業和裁技能検定 2 級学科模擬試験問題集

平成19 年年度

1. 次の説明文のうち、正しいものに○印、誤っているものに×印を（ ）の中に付けなさい。
- () 1. 家蚕の繭糸 1 本の太さは約15デニールである。
- () 2. 綿とアクリルの混紡は、冬の肌着の材料として最も適している。
- () 3. 生糸とは、蚕の繭から取ったままの繊維で、精練を施していない絹糸のことである。
- () 4. 黄八丈は、八丈カリヤスという植物染料を用いて染める。
- () 5. 型友禅は 1 色に 1 枚ずつ型紙を使う。
- () 6. 女物の長着を仕立てる場合、胸の大きい人は肩山から剣先までの斜めを大きくして、身八ツロを長くした方がよい。
- () 7. 子持縞柄は追裁ちにするのが普通である。
- () 8. 肥った人の長着は、衿肩明きを大きく、繰越を多くした方がよい。
- () 9. 長襦袢の後身幅、前身幅は、着物の下に着るので、着物の身幅より狭くするのがよい。
- () 10. 鳩胸の人は長襦袢を着ると前が上がるので、身八ツロにタックをとって前丈を長くするとよい。
- () 11. 女物長着袖付けを付違いにする場合、後袖付けを長くする。
- () 12. 婦人で猫背の人の着物は繰越を少なめにすると欠点が隠れる。
- () 13. 男物羽織の箱褶というのは太った体格のいい人には向かない。
- () 14. 単羽織の衿を鉄砲付けする場合、前後褶を付けてから衿を付ける。
- () 15. 都衿コートの小衿布は普通100～115cm (2尺7寸～3尺) 位を必要とする。
- () 16. 二部式コートの下着丈は、腰骨の上 8 cm (2 寸) から、裾はくるぶしが隠れる位が適当である。
- () 17. 現在着用されている女袴の起源は江戸時代末期である。
- () 18. 小袖が現代の着物の形とほぼ同じになったのは安土・桃山時代である。
- () 19. 名古屋帯を締めるとき、手(胴)は「わ」の方を必ず上にして締める。
- () 20. 男子の正装のとき、羽織の紐は黒である。
- () 21. ミスの着付けはミセスに比べ、一般に帯の位置を高くする。
- () 22. 総絞りの裏打ちは、共糸で裏打ちしなければならない。
- () 23. 経帷子(きょうかたびら)は僧侶が読経の時に袈裟の下に着る白衣である。
- () 24. 男物羽織には普通、繰越を付けない。
- () 25. 紅下とは、紅を下染めして、その上から他の色をかけることをいい、主に黒染めに用いる。
- () 26. 男袴の紐下は、後腰板の下部から裾までの長さをいう。
- () 27. 仕舞袴の腰板には、できるだけ軟らかいボール紙を使用する。
- () 28. 浴衣や羽織下に締める半幅帯は、文庫結びや貝の口に結ぶ場合が多いのでその長さは 4 m (1丈5寸) 位である。
- () 29. 名古屋帯の手丈は、胴回り×2 + 75cm (1尺9寸8分) 位である。
- () 30. 男児用筒袖には振りを付け、身八ツロをあける。
- () 31. 子供物の肩揚げ衿は、身長 $\frac{1}{2}$ に 2 cm (5 分) を加えたものを標準とする。
- () 32. 女物綿入れ長着の寸法、要尺、裁ち方、標付は女物長着と同じでよい。
- () 33. ミシン針は薄手を縫う場合は 9 番、厚手は 14 番くらいがよい。
- () 34. 現在、和服の縫製そのものについて JIS 規定ができていない。
- () 35. 和裁の作業場では 300ルクスあれば充分の明るさである。
- () 36. ナイロンは合成繊維で、アセテートは再生繊維である。
- () 37. 塩瀬とは(一般には塩瀬羽二重を指す)本来織り方をいう言葉で毛織物にも応用される。
- () 38. 色の三原色は赤、緑、紫で、光の三原色は赤、黄、青である。
- () 39. 綴織は西洋のゴブラン織と同じような方法で織られ、緯糸より経糸の方が細く、模様は緯糸によって表される。
- () 40. 経糸、緯糸が交錯することが少なく、長く連続して布面に浮いて光沢のある織物は朱子織である。
- () 41. 普通体型の人の抱幅は胸囲の $\frac{1}{3}$ とするとよい。
- () 42. 男物長着の内揚げ位置は、後より前を低くするのが普通であり、その位置は帯の下に隠れるような高さが良く、普通肩より測って着丈の $\frac{4}{10}$ 位下がった位置が適当である。
- () 43. 1 m は鯨尺では 2 尺 6 寸 4 分である。
- () 44. 田之助衿とは長襦袢の半衿の付け方の一種である。
- () 45. 無双羽織の裁ち方は、両面羽織の裁ち方と同じである。
- () 46. 訪問着を着用する時は、必ず絵羽織を着るのが正しい。
- () 47. 女袴の相引の寸法は、紐下の $\frac{1}{3}$ が普通である。
- () 48. 被布には襠がなく、羽織には襠がある。
- () 49. 千代田衿は都衿より堅衿下がりが少ないので、堅衿丈を長くとる。
- () 50. 一ツ身、ニツ身、三ツ身、四ツ身の元禄袖長着の場合、衿はいずれも袖からとる。
- () 51. 子負い袴天には衿のつくものと衿なしがある。
- () 52. 宮詣り初着には肩揚げはつけるが腰揚げはつけない。
- () 53. 補綴の種類として、刺し縫い、かけつぎ、穴つぎ、刺しつぎ、織り込みつぎなどがある。
- () 54. 日本における家庭用電源は 100V を使用している。10A (7 $\frac{1}{2}$ A) コンセントでは次のように 3 つずつの電気器具を使用出来る。
- ① 300W×3 ② 100W×2 + 700W ③ 500W×2 + 100W
- () 55. 生糸は 2 本のフィブロインと、それらを包んでいるにわか質のセリシンとで、そのほとんどが占められている。
- () 56. 奈良時代の染色技法である三纈のひとつに纈纈があり、これはローケツ染めのことである。
- () 57. 男物羽織の抱紋の位置は、普通反物の中央にある。
- () 58. 刺し縫いという補綴技法は布地がすれて弱った時、それを補強する為に用いられる。
- () 59. 袴の前紐の丈は、胴回りの 4 倍あるとよい。
- () 60. 弔事の略式礼装で色無地紋付を着用した場合、帯は上着と同色のものを用いる。
- () 61. 婦人用羽織の衿用布は、羽織丈に約 27cm (約 7 寸) を加えたものを 2 倍とればできる。
- () 62. 袷長着を仕立てる時、通し裏と裾廻し付きがあるが、通し裏仕立ては一般的には男物に多い。
- () 63. シルクウールは経糸に絹糸、緯糸にウール糸を用いた交織織物である。

- () 64. 結城紬、小千谷縮、塩瀬羽二重などはいずれも新潟県の特産物である。
- () 65. 有松絞り、博多織りは主として絹布に絞られる。
- () 66. 無双織の布地で袴を仕立てる場合、裏腰布は裏布使いとする。
- () 67. 天然繊維の中では、麻の繊維が最も長い。
- () 68. 色の寒暖は有彩色だけでなく、無彩色にもある。
- () 69. 木綿の手縫い糸は、厚物には30番、薄物には50番カタン糸を使うとよい。
- () 70. 京小紋は多くの色を使って染められているが、江戸小紋は1色で染める。
- () 71. 男女本裁長着の衿寸法は身長×0.5+2cm(5分)を基準とする。
- () 72. 女物長着の袴下(衿下)寸法は着丈の1/2位が着崩れしない。
- () 73. 長着の袖の柄は普通、右前、左後に大柄をもってくる。
- () 74. 道行コートの小衿付けは、衿肩回りでは小衿を十分にゆるくする。
- () 75. 袴は武士の礼服として着用された。
- () 76. 千代田衿はその人の体型、年齢にかかわらず同じ衿型でよい。
- () 77. 雨コートの身丈は、身長×0.8位を基準とし、体型その他により加減するとよい。
- () 78. 左右の身頃を並幅1枚で仕立てる着物は一ツ身である。
- () 79. 羅、紗、平織、紅梅はからみ組織の織物である。
- () 80. 一越縮緬の織り方は平織りである。
- () 81. 四君子模様とは松、桐、菊、蘭の文様である。
- () 82. 糸は太いほどデニール数は大きくなり、番手の数は小さくなる。
- () 83. 衿の採寸は、手首を腰にあてた形で背の中央から肩線に沿い、手首のところまで測る。
- () 84. 男物長着の袴下(衿下)は、身長の約1/3を基準にする。
- () 85. 女児の付紐は、縫目を下にして付ける。
- () 86. 単羽織を裁つ場合、普通前落として襠と袖口布が取れるように注意しなければならない。
- () 87. 留袖の付比翼の裾丈は、上着胴接ぎ位置より高い方がよい。
- () 88. 袖先に丸みを付けないで、袖丈と袖口が同じ長さの一ツ身や袴天の袖を大名袖という。
- () 89. 道行コートはフォーマルなもので、寒い時はもちろん、どんな時でも脱ぐ必要はない。
- () 90. 女物袷長着の裾廻し(八掛)の要尺は、小幅(並幅)では380~400cm(1丈~1丈5寸)、胴裏は小幅(並幅)で800~850cm(2丈1尺~2丈2尺)を標準とする。
- () 91. 長着の袖付けが付け違いの場合、羽織やコートも長着に合わせ付け違いにする。
- () 92. 女物袷長着の袖口布は裾廻し共布使用であるが、男物袷長着の袖口布は黒八丈、黒琥珀、八端等を使用する。
- () 93. 打掛は掛衿(共衿)と袖口布をつけない方が正しい。
- () 94. 石持ちには日向紋は染められるが、陰紋は染められない。
- () 95. ビロードで毛の向きにより光沢の違う場合には追い裁ちにはいけない。
- () 96. 道行コートの縞および柄物のとき、堅衿上の小衿の柄を合わせるため生地に横布を使う事がある。
- () 97. 四ツ身裁ちの着物は衿を後身頃からとり、羽織は衿を前身頃からとる。
- () 98. 裁ち板には柳、朴、桂、銀杏などのよく枯れたものが適している。
- () 99. アイロンなどで火傷をした場合、応急処置としては、水で局部を冷やすのが普通である。
- () 100. ほとんどの和裁用具は普通、右側に揃えて置くが、物差しは左側に置く方がよい。
- () 101. 平織、綾(斜文)織、朱子織を織物の三原組織という。
- () 102. 綿糸や綿布をカセイソーダにつけると絹のような光沢が出るが、これをシルケット加工という。
- () 103. 色の三属性とは明度、彩度、色度のことである。
- () 104. 表面に膠液の吹きかけてある吹止真綿は、膠液のかけてある側を裏布側になるように入れる。
- () 105. 成人男子の袴の紐下は、着丈の1/2位がちょうどよい。
- () 106. 丸帯と袋帯は幅、丈ともにほぼ同じくらいで、幅は30~32cm(8寸~8寸5分)で、丈は4.5~4.7m(1丈1尺9寸~1丈2尺4寸)位である。
- () 107. 掛下帯の柄ポイントは、帯丈の中央である。
- () 108. 四ツ身裁ち羽織の衿は、後身頃を輪にして後身頃よりとり、袖口、襠布は前身頃よりとる。
- () 109. 共衿(掛衿)を2本取る場合、仕立寸法に用布を見積もり、50cm残ればとれる。
- () 110. 本裁男女の長襦袢の身丈は、身長の80~83%位に決めればよい。
- () 111. 男物長着の身丈は(身長-25~27cm(6寸6分~7寸1分))あるいは(身長×0.83~0.85)位でよい。
- () 112. 下記の繊維のうち、吸湿により強くなる繊維は①で、最も弱くなるのは④である。
① アセテート ② 絹 ③ 麻 ④ レーヨン
- () 113. 野蚕絹は内部まで色素を含んでいるので、家蚕絹に比べ漂白、染色が困難である。
- () 114. 上布とは、一般に麻織物であるが、薩摩、越後、能登、大和上布は絹織物である。
- () 115. 魚子織とは斜文織風の帯地である。
- () 116. 羽二重、御召は先染物であり、紬は後染物である。
- () 117. 下記の中で、ヤング率の最大のものはアである。
ア. 麻 イ. 木綿 ウ. 羊毛 エ. 絹 オ. アセテート
- () 118. 糸には撚りがかけられているが、右撚りはZ撚り、左撚りはS撚りである。
- () 119. 交織とは経緯が異なった糸で織られた織物であり、混紡とは異なった素材を混ぜて紡いだ糸を使って織った織物である。
- () 120. 染め抜き紋には日向紋や陰紋があり、陰紋には中陰紋、本陰紋ある。
- () 121. 2匹の蚕が共同して作った繭を玉繭といい、これからとった糸を玉糸という。
- () 122. ナイロンやポリエステルのような合成繊維は酸に強いが熱に弱い。レーヨンのような再生繊維はその反対である。
- () 123. 紅型は1枚か2枚の型紙を使って染め、後で手書きで色を差し入れる。
- () 124. 三纈といわれる代表的な染色技術は、室町時代にできたものである。
- () 125. チューイングガムや泥はねでついたしみは、ついたら直ぐ取った方がよい。
- () 126. 背が高く痩せ型の人の衿は、肩幅より袖幅を広めにした方がよい。
- () 127. 本裁女物長襦袢の半無双袖は、袖口と振りとは振りの方に表地をつけた方がよい。
- () 128. 用尺不足でかぎ衽裁ちにする場合、片面しか使えない布は、うば衽裁ちにしなければならない。
- () 129. 羽織を追裁ちに裁った場合、後身頃の柄が上を向くようにするのがよい。

- () 130. コートの袖丈は、着物の上に着るから着物より長くする。
- () 131. 十徳は羽織の原型で、もともと僧侶や茶人が着用したものである。
- () 132. 色留袖は五つ紋を付けても正式礼装には用いられない。
- () 133. 髪置の祝いは5歳の祝いである。
- () 134. 夏の単衣本重ねの下着のつめ寸法は、後幅0.4cm(1分)、前幅1cm(2分5厘)つめるとよい。
- () 135. 日本の家紋でよく使われる紋は、植物をモチーフ(題材)にしたものが多い。
- () 136. 男袴の行燈袴と襠付袴では、行燈袴の方が襠が付かないだけ用布が少なくすむ。
- () 137. 女袴のひだの数は、普通前4つ、後3つである。
- () 138. 名古屋帯地の要布は、普通4.6m(1丈2尺1寸位)である。
- () 139. 都衿コートは、小衿を前落としからとり、型紙を用いない。
- () 140. 子供物の着丈は身長 $\frac{8}{10}$ を標準とする。
- () 141. ミシンの上糸を調節する場合、糸調節部分の大きな数字に合わせれば上糸が強くなり、小さな数字に合わせれば上糸が弱くなる。
- () 142. 照度を示すルクスは、その数字が大きくなる程明るくなる。
- () 143. 疋田や鹿の子の柄は、両方とも絞り染めである。
- () 144. 型染に使用する型紙は和紙を数枚はり合わせた物に、柿渋などを塗って耐水性をもたせ、模様を彫刻したものである。
- () 145. 日本の三大緋とは一般に肥後緋、久留米緋、伊予緋をいう。
- () 146. 男物長着の通し裏の揚げは必ず肩山です。
- () 147. 肌襦袢に適した布の条件は、清潔で吸湿性に富んでいることである。
- () 148. 大紋は平安末期になって狩衣から分化したもので、現代の五ツ紋の源流とみなされている。
- () 149. 帯で、正式礼装用として格式が高いのは、染めの帯より織の帯である。
- () 150. 掛下の袖丈は打掛の袖丈より2cm(5分)長くする。
- () 151. 男袴の相引寸法は行燈袴、襠付袴とも紐下の $\frac{2}{3}$ 位とする。
- () 152. 標準体型の人が使用する名古屋帯の手柄中心は、手先から測ると150~160cm(4尺~4尺2寸5分)のところにある。
- () 153. 男子の正装用の帯は兵児帯を用いる。
- () 154. ヘラは骨材のもので、大きめのものがよく、先はできるだけ薄くしたものの方がはっきり標が付いてよい。
- () 155. 草木染とは、花、草、樹木などの模様を染め出したものである。
- () 156. 共衿(掛衿)の上前と下前に合口がある場合、紋下がりで衿肩明を決めてあれば、上前衿、下前衿とも合口はよく合う。
- () 157. 薄い布を2枚重ねて切る時は、はさみ(右利き用)を少し右に倒して切ると布がずれなくてよい。
- () 158. 袷長襦袢の胴接ぎの縫い代は、裾の方へ折るのが普通である。
- () 159. ①着尺1反 ②ウールアンサンブル ③村山大島1疋のうち、③が一番長い反物である。
- () 160. 本裁女物長着の裾廻しが短尺物の場合、前裾布から袖口布をとる場合がある。
- () 161. 鮫小紋の着物は、紋を付けても略礼装の着物にならない。
- () 162. 中振、訪問着、おしゃれ着に伊達衿を付けてもよい。
- () 163. 男物甚平の袖には人形がつく。
- () 164. 友禅染は、江戸中期、宮崎友禅齋が創案したものといわれ、現在手描き友禅、型友禅などがある。
- () 165. 一越縮緬とは緯糸に左撚りと右撚りを交互に織り込んだもので、2本おきに織り込んだものを二越縮緬という。
- () 166. 次に挙げる名称はすべて格子縞のことをいう。
弁慶・市松・大名・業平・菊五郎・子持・三筋・吉野
- () 167. 着物や羽織の大きな袖丸は外に着るほど大きくするとよい。
- () 168. 和裁で使用されている手縫いの針で4の3とか、4の2という呼び方は、JISで規定された名称である。
- () 169. 小紋やお召の上でも女袴を着用すれば略礼装となる。
- () 170. 名古屋帯のポケットは、手先から標準寸法で2mの位置を中心として40cm位ポケット口をあける。
- () 171. 子供物の腰揚げは身長の半分の位置で折り、その山を腰揚げの山として揚げをする。
- () 172. 直線本縫いミシンは、家庭用と職業用に大別され、家庭用はカマが半回転式で、縫い速度は毎分6,000針程度である。
- () 173. 布地が裂けた場合や穴があいた場合にする補綴作業は、織り込みである。
- () 174. 女物の礼装用には、着物も帯も後染物が用いられる。
- () 175. 江戸小紋は、昭和になって名付けられた名称である。
- () 176. 柄裁ちをする場合、長着は上前の前身頃および胸にポイントをおき、羽織は後身頃にポイントをおく。

2. 次の問題について、その裁ち方を図解し、各部名称をよく分かるように記入しなさい。

また各部は寸法に応じて配分し、裁ち切るところを実線で示しなさい。

① 並幅物11m86cm(3尺1寸3分)の反物で五つ紋付の本裁女物長着を下記指定寸法で追い裁ちにしたい。

裁断図と紋の位置及び各部の寸法を書きなさい。

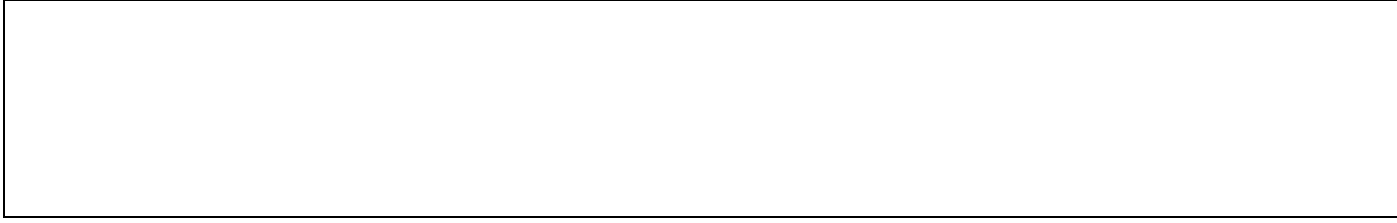
身丈背より出来上がり161cm(4尺2寸5分)、袖丈出来上がり49.3cm(1尺3寸)、繰越2cm(5分)

裾下出来上がり79.2cm(2尺1寸)、他標準寸法とする。

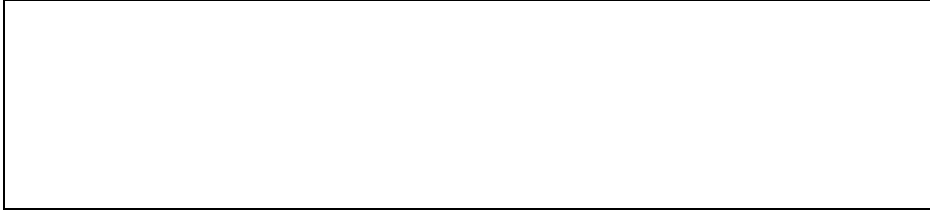
(注) 上前身頃・下前身頃・上前衿・上前共衿・上前衽裾・下前衽裾などの位置を書きなさい。

※衿肩明線は記入、未記入ともに正解

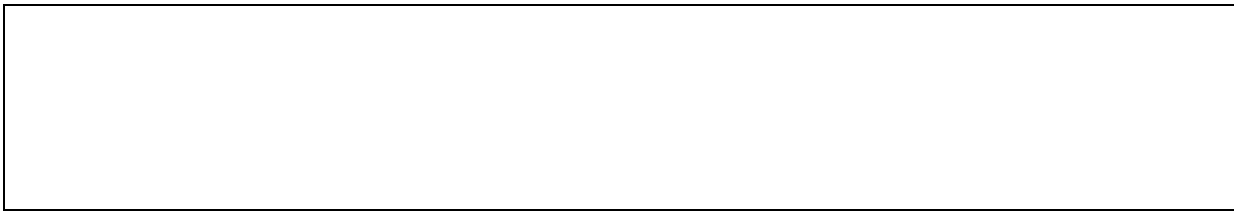
- ② 並幅6m（1丈5尺9寸）の表地を使用して女物羽織を作りたい。裁断図を書きなさい。（表地のみ）
ただし、衿寸法は62.5cm（1尺6寸5分）とする。



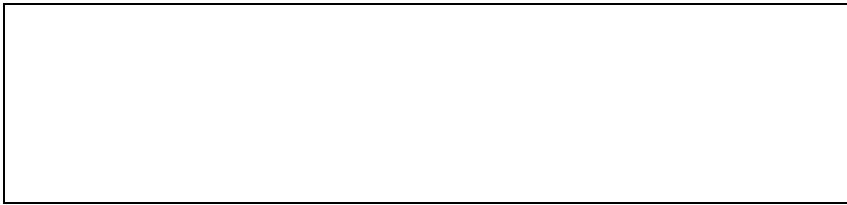
- ③ 大幅76cm（2尺）、長さ6.4m（1丈7尺）で男物長襦袢の裁断図を書きなさい。（表地のみ）



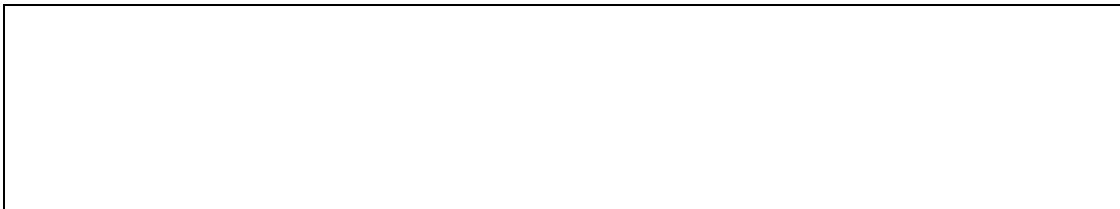
- ④ 並幅物8m（2丈1尺1寸）の反物で四つ身長着を作りたい。裁断図を書きなさい。



- ⑤ 並幅物4m（1丈5寸）で一つ身長着を作りたい。裁断図を書きなさい。



- ⑥ 並幅物 12m（3丈1尺7寸）で本裁女物長襦袢を作りたい。裁断図を書きなさい。



- ⑦ 並幅物裾廻し（八掛）3.3m（8尺7寸位）の短尺の場合の裁断図を書きなさい。



- ⑧ 並幅物 11.8m（3丈1尺2寸）で留袖用比翼を作りたい。裁断図を書きなさい。
ただし、袖は口、振とし、衿裏共布とする。



1. 次の説明文のうち、正しいものに○印、誤っているものに×印を（ ）の中に付けなさい。

- (×) 1. 家蚕の繭糸1本の太さは約15デニールである。
 (○) 2. 綿とアクリルの混紡は、冬の肌着の材料として最も適している。
 (○) 3. 生糸とは、蚕の繭から取ったままの繊維で、精練を施していない絹糸のことである。
 (○) 4. 黄八丈は、八丈カリヤスという植物染料を用いて染める。
 (○) 5. 型友禅は1色に1枚ずつ型紙を使う。
 (○) 6. 女物の長着を仕立てる場合、胸の大きい人は肩山から剣先までの斜めを大きくして、身八ツロを長くした方がよい。
 (○) 7. 子持縞柄は追裁ちにするのが普通である。
 (○) 8. 肥った人の長着は、衿肩明きを大きく、繰越を多くした方がよい。
 (×) 9. 長襦袢の後身幅、前身幅は、着物の下に着るので、着物の身幅より狭くするのがよい。
 (○) 10. 鳩胸の人は長襦袢を着ると前が上がるので、身八ツロにタックをとって前丈を長くするとよい。
 (×) 11. 女物長着袖付けを付違いにする場合、後袖付けを長くする。
 (○) 12. 婦人で猫背の人の着物は繰越を少なめにすると欠点が隠れる。
 (×) 13. 男物羽織の箱褶というのは太った体格のいい人には向かない。
 (×) 14. 単羽織の衿を鉄砲付けする場合、前後褶を付けてから衿を付ける。
 (×) 15. 都衿コートの小衿布は普通100～115cm(2尺7寸～3尺)位を必要とする。
 (○) 16. 二部式コートの下着丈は、腰骨の上8cm(2寸)から、裾はくるぶしが隠れる位が適当である。
 (×) 17. 現在着用されている女袴の起源は江戸時代末期である。
 (○) 18. 小袖が現代の着物の形とほぼ同じになったのは安土・桃山時代である。
 (×) 19. 名古屋帯を締めるとき、手(胴)は「わ」の方を必ず上にして締める。
 (×) 20. 男子の正装のとき、羽織の紐は黒である。
 (○) 21. ミスの着付けはミセスに比べ、一般に帯の位置を高くする。
 (×) 22. 総絞りの裏打ちは、共糸で裏打ちしなければならない。
 (×) 23. 経帷子(きょうかたびら)は僧侶が読経の時に袈裟の下に着る白衣である。
 (×) 24. 男物羽織には普通、繰越を付けない。
 (○) 25. 紅下とは、紅を下染めして、その上から他の色をかけることをいい、主に黒染めに用いる。
 (×) 26. 男袴の紐下は、後腰板の下部から裾までの長さをいう。
 (×) 27. 仕舞袴の腰板には、できるだけ軟らかいボール紙を使用する。
 (×) 28. 浴衣や羽織下に締める半幅帯は、文庫結びや貝の口に結ぶ場合が多いのでその長さは4m(1丈5寸)位である。
 (○) 29. 名古屋帯の手丈は、胴回り×2+75cm(1尺9寸8分)位である。
 (×) 30. 男児用筒袖には振りを付け、身八ツロをあける。
 (×) 31. 子供物の肩揚げ衿は、身長1/2に2cm(5分)を加えたものを標準とする。
 (○) 32. 女物綿入れ長着の寸法、要尺、裁ち方、標付は女物長着と同じでよい。
 (○) 33. ミシン針は薄手を縫う場合は9番、厚手は14番くらいがよい。
 (○) 34. 現在、和服の縫製そのものについてJIS規定ができていない。
 (×) 35. 和裁の作業場では300ルクスあれば充分の明るさである。
 (×) 36. ナイロンは合成繊維で、アセテートは再生繊維である。
 (○) 37. 塩瀬とは(一般には塩瀬羽二重を指す)本来織り方をいう言葉で毛織物にも応用される。
 (×) 38. 色の三原色は赤、緑、紫で、光の三原色は赤、黄、青である。
 (○) 39. 綴織は西洋のゴブラン織と同じような方法で織られ、緯糸より経糸の方が細く、模様は緯糸によって表される。
 (○) 40. 経糸、緯糸が交錯することが少なく、長く連続して布面に浮いて光沢のある織物は朱子織である。
 (×) 41. 普通体型の人の抱幅は胸囲の1/3とするとよい。
 (○) 42. 男物長着の内揚げ位置は、後より前を低くするのが普通であり、その位置は帯の下に隠れるような高さが良く、普通肩より測って着丈の4/10位下がった位置が適当である。
 (○) 43. 1mは鯨尺では2尺6寸4分である。
 (○) 44. 田之助衿とは長襦袢の半衿の付け方の一種である。
 (×) 45. 無双羽織の裁ち方は、両面羽織の裁ち方と同じである。
 (×) 46. 訪問着を着用する時は、必ず絵羽織を着るのが正しい。
 (×) 47. 女袴の相引の寸法は、紐下の1/3が普通である。
 (×) 48. 被布には襠がなく、羽織には襠がある。
 (○) 49. 千代田衿は都衿より堅衿下がりが少ないので、堅衿丈を長くとる。
 (×) 50. 一ツ身、ニツ身、三ツ身、四ツ身の元禄袖長着の場合、衿はいずれも袖からとる。
 (○) 51. 子負い袴天には衿のつくものと衿なしがある。
 (×) 52. 宮詣り初着には肩揚げはつけるが腰揚げはつけない。
 (○) 53. 補綴の種類として、刺し縫い、かけつぎ、穴つぎ、刺しつぎ、織り込みつぎなどがある。
 (×) 54. 日本における家庭用電源は100Vを使用している。10A(7.5A)コンセントでは次のように3つずつの電気器具を使用出来る。
 ① 300W×3 ② 100W×2+700W ③ 500W×2+100W
 (○) 55. 生糸は2本のフィブロインと、それらを包んでいるにわか質のセリシンとで、そのほとんどが占められている。
 (×) 56. 奈良時代の染色技法である三纈のひとつに纈纈があり、これはローケツ染めのことである。
 (×) 57. 男物羽織の抱紋の位置は、普通反物の中央にある。
 (○) 58. 刺し縫いという補綴技法は布地がすれて弱った時、それを補強する為に用いられる。
 (×) 59. 袴の前紐の丈は、胴回りの4倍あるとよい。
 (×) 60. 弔事の略式礼装で色無地紋付を着用した場合、帯は上着と同色のものを用いる。
 (○) 61. 婦人用羽織の衿用布は、羽織丈に約27cm(約7寸)を加えたものを2倍とればできる。

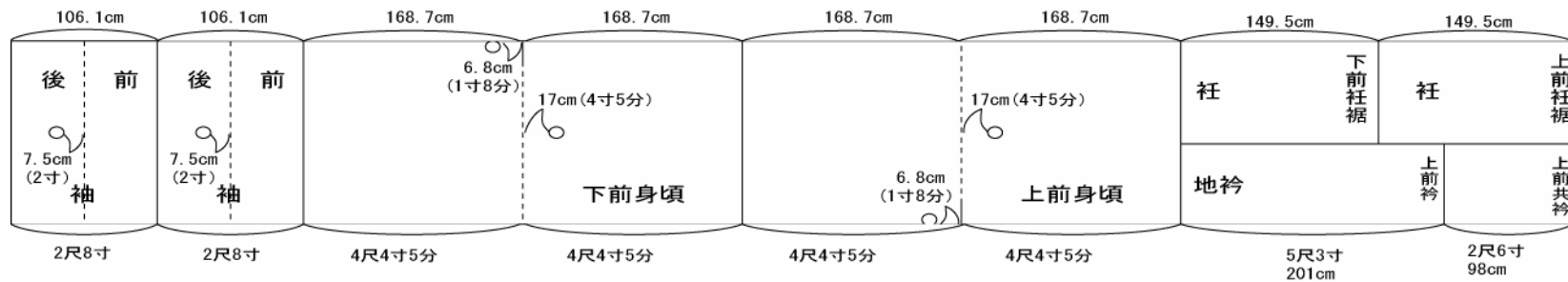
- (○) 62. 袷長着を仕立てる時、通し裏と裾廻し付きがあるが、通し裏仕立ては一般的には男物に多い。
- (○) 63. シルクウールは経糸に絹糸、緯糸にウール糸を用いた交織織物である。
- (×) 64. 結城紬、小千谷縮、塩瀬羽二重などはいずれも新潟県の特産物である。
- (×) 65. 有松絞り、博多織りは主として絹布に絞られる。
- (○) 66. 無双織の布地で袴を仕立てる場合、裏腰布は裏布使いとする。
- (×) 67. 天然繊維の中では、麻の繊維が最も長い。
- (×) 68. 色の寒暖は有彩色だけでなく、無彩色にもある。
- (○) 69. 木綿の手縫い糸は、厚物には30番、薄物には50番カタン糸を使うとよい。
- (○) 70. 京小紋は多くの色を使って染められているが、江戸小紋は1色で染める。
- (×) 71. 男女本裁長着の衿寸法は身長×0.5+2cm(5分)を基準とする。
- (×) 72. 女物長着の棲下(衿下)寸法は着丈の1/2位が着崩れしない。
- (×) 73. 長着の袖の柄は普通、右前、左後に大柄をもってくる。
- (×) 74. 道行コートの小衿付けは、衿肩回りでは小衿を十分にゆるくする。
- (○) 75. 袴は武士の礼服として着用された。
- (×) 76. 千代田衿はその人の体型、年齢にかかわらず同じ衿型でよい。
- (○) 77. 雨コートの身丈は、身長×0.8位を基準とし、体型その他により加減するとよい。
- (○) 78. 左右の身頃を並幅1枚で仕立てる着物は一ツ身である。
- (×) 79. 羅、紗、平織、紅梅はからみ組織の織物である。
- (○) 80. 一越縮緬の織り方は平織りである。
- (×) 81. 四君子模様とは松、桐、菊、蘭の文様である。
- (○) 82. 糸は太いほどデニール数は大きくなり、番手の数は小さくなる。
- (×) 83. 衿の採寸は、手首を腰にあてた形で背の中央から肩線に沿い、手首のところまで測る。
- (×) 84. 男物長着の棲下(衿下)は、身長の約1/3を基準にする。
- (×) 85. 女兒の付紐は、縫目を下にして付ける。
- (○) 86. 単羽織を裁つ場合、普通前落として裾と袖口布が取れるように注意しなければならない。
- (○) 87. 留袖の付比翼の裾丈は、上着胴接ぎ位置より高い方がよい。
- (×) 88. 袖先に丸みを付けないで、袖丈と袖口が同じ長さの一ツ身や袴天の袖を大名袖という。
- (×) 89. 道行コートはフォーマルなもので、寒い時はもちろん、どんな時でも脱ぐ必要はない。
- (○) 90. 女物袷長着の裾廻し(八掛)の要尺は、小幅(並幅)では380~400cm(1丈~1丈5寸)、胴裏は小幅(並幅)で800~850cm(2丈1尺~2丈2尺)を標準とする。
- (×) 91. 長着の袖付けが付け違いの場合、羽織やコートも長着に合わせて付け違いにする。
- (○) 92. 女物袷長着の袖口布は裾廻し共布使いであるが、男物袷長着の袖口布は黒八丈、黒琥珀、八端等を使用する。
- (○) 93. 打掛は掛衿(共衿)と袖口布をつけない方が正しい。
- (×) 94. 石持ちには日向紋は染められるが、陰紋は染められない。
- (×) 95. ピロードで毛の向きにより光沢の違う場合には追い裁ちにははいけない。
- (○) 96. 道行コートの縞および柄物のとき、堅衿上の小衿の柄を合わせるため生地に横布を使う事がある。
- (○) 97. 四ツ身裁ちの着物は衿を後身頃からとり、羽織は衿を前身頃からとる。
- (○) 98. 裁ち板には柳、朴、桂、銀杏などのよく枯れたものが適している。
- (○) 99. アイロンなどで火傷をした場合、応急処置としては、水で局部を冷やすのが普通である。
- (○) 100. ほとんどの和裁用具は普通、右側に揃えて置くが、物差しは左側に置く方がよい。
- (○) 101. 平織、綾(斜文)織、朱子織を織物の三原組織という。
- (○) 102. 綿糸や綿布をカセイソーダにつけると絹のような光沢が出るが、これをシルケット加工という。
- (×) 103. 色の三属性とは明度、彩度、色度のことである。
- (×) 104. 表面に膠液の吹きかけてある吹止真綿は、膠液のかけてある側を裏布側になるように入れる。
- (×) 105. 成人男子の袴の紐下は、着丈の1/2位がちょうどよい。
- (×) 106. 丸帯と袋帯は幅、丈ともにほぼ同じくらいで、幅は30~32cm(8寸~8寸5分)で、丈は4.5~4.7m(1丈1尺9寸~1丈2尺4寸)位である。
- (○) 107. 掛下帯の柄ポイントは、帯丈の中央である。
- (×) 108. 四ツ身裁ち羽織の衿は、後身頃を輪にして後身頃よりとり、袖口、裾布は前身頃よりとる。
- (○) 109. 共衿(掛衿)を2本取る場合、仕立寸法に用布を見積もり、50cm残ればとれる。
- (○) 110. 本裁男女の長襦袢の身丈は、身長の80~83%位に決めればよい。
- (○) 111. 男物長着の身丈は(身長-25~27cm(6寸6分~7寸1分))あるいは(身長×0.83~0.85)位でよい。
- (×) 112. 下記の繊維のうち、吸湿により強くなる繊維は①で、最も弱くなるのは④である。
① アセテート ② 絹 ③ 麻 ④ レーヨン
- (○) 113. 野蚕絹は内部まで色素を含んでいるので、家蚕絹に比べ漂白、染色が困難である。
- (×) 114. 上布とは、一般に麻織物であるが、薩摩、越後、能登、大和上布は絹織物である。
- (×) 115. 魚子織とは斜文織風の帯地である。
- (×) 116. 羽二重、御召は先染物であり、紬は後染物である。
- (○) 117. 下記の中で、ヤング率の最大のものはアである。
ア. 麻 イ. 木綿 ウ. 羊毛 エ. 絹 オ. アセテート
- (×) 118. 糸には撚りがかけられているが、右撚りはZ撚り、左撚りはS撚りである。
- (○) 119. 交織とは経緯が異なった糸で織られた織物であり、混紡とは異なった素材を混ぜて紡いだ糸を使って織った織物である。
- (○) 120. 染め抜き紋には日向紋や陰紋があり、陰紋には中陰紋、本陰紋ある。
- (○) 121. 2匹の蚕が共同して作った繭を玉繭といい、これからとった糸を玉糸という。
- (○) 122. ナイロンやポリエステルのような合成繊維は酸に強いが熱に弱い。レーヨンのような再生繊維はその反対である。
- (○) 123. 紅型は1枚か2枚の型紙を使って染め、後で手書きで色を差し入れる。
- (×) 124. 三纈といわれる代表的な染色技術は、室町時代にできたものである。
- (×) 125. チューインガムや泥はねでついたしみは、ついたら直ぐ取った方がよい。

- (○) 126. 背が高く痩せ型の人の衿は、肩幅より袖幅を広めにした方がよい。
- (○) 127. 本裁女物長襦袢の半無双袖は、袖口と振りとは振りの方に表地をつけた方がよい。
- (○) 128. 要尺不足でかぎ衽裁ちにする場合、片面しか使えない布は、うば衽裁ちにしなければならない。
- (○) 129. 羽織を追裁ちに裁った場合、後身頃の柄が上を向くようにするのがよい。
- (×) 130. コートの袖丈は、着物の上に着るから着物より長くする。
- (○) 131. 十徳は羽織の原型で、もともと僧侶や茶人が着用したものである。
- (×) 132. 色留袖は五つ紋を付けても正式礼装には用いられない。
- (×) 133. 髪置の祝いは5歳の祝いである。
- (×) 134. 夏の単衣本重ねの下着のつめ寸法は、後幅0.4cm(1分)、前幅1cm(2分5厘)つめるとよい。
- (○) 135. 日本の家紋でよく使われる紋は、植物をモチーフ(題材)にしたものが多い。
- (×) 136. 男袴の行燈袴と襠付袴では、行燈袴の方が襠が付かないだけ用布が少なくてすむ。
- (×) 137. 女袴のひだの数は、普通前4つ、後3つである。
- (○) 138. 名古屋帯地の要布は、普通4.6m(1丈2尺1寸位)である。
- (×) 139. 都衿コートは、小衿を前落しからとり、型紙を用いない。
- (○) 140. 子供物の着丈は身長 $\frac{8}{10}$ を標準とする。
- (○) 141. ミシンの上糸を調節する場合、糸調節部分の大きな数字に合わせれば上糸が強くなり、小さな数字に合わせれば上糸が弱くなる。
- (○) 142. 照度を示すルクスは、その数字が大きくなる程明るくなる。
- (×) 143. 疋田や鹿の子の柄は、両方とも絞り染めである。
- (○) 144. 型染に使用する型紙は和紙を数枚はり合わせた物に、柿渋などを塗って耐水性をもたせ、模様を彫刻したものである。
- (×) 145. 日本の三大緋とは一般に肥後緋、久留米緋、伊予緋をいう。
- (×) 146. 男物長着の通し裏の揚げは必ず肩山です。
- (○) 147. 肌襦袢に適した布の条件は、清潔で吸湿性に富んでいることである。
- (○) 148. 大紋は平安末期になって狩衣から分化したもので、現代の五ツ紋の源流とみなされている。
- (○) 149. 帯で、正式礼装用として格式が高いのは、染めの帯より織の帯である。
- (○) 150. 掛下の袖丈は打掛の袖丈より2cm(5分)長くする。
- (○) 151. 男袴の相引寸法は行燈袴、襠付袴とも紐下の $\frac{2}{3}$ 位とする。
- (×) 152. 標準体型の人が使用する名古屋帯の手柄中心は、手先から測ると150~160cm(4尺~4尺2寸5分)のところにある。
- (×) 153. 男子の正装用の帯は兵児帯を用いる。
- (×) 154. ヘラは骨材のもので、大きめのものがよく、先はできるだけ薄くしたもののほうがはっきり標が付いてよい。
- (×) 155. 草木染とは、花、草、樹木などの模様を染め出したものである。
- (×) 156. 共衿(掛衿)の上前と下前に合口がある場合、紋下がりて衿肩明を決めてあれば、上前衿、下前衿とも合口はよく合う。
- (○) 157. 薄い布を2枚重ねて切る時は、はさみ(右利き用)を少し右に倒して切ると布がずれなくてよい。
- (○) 158. 袷長襦袢の胴接ぎの縫い代は、裾の方へ折るのが普通である。
- (○) 159. ①着尺1反 ②ウールアンサンブル ③村山大島1疋のうち、③が一番長い反物である。
- (○) 160. 本裁女物長着の裾廻しが短尺物の場合、前裾布から袖口布をとる場合がある。
- (×) 161. 鮫小紋の着物は、紋を付けても略礼装の着物にならない。
- (○) 162. 中振、訪問着、おしゃれ着に伊達衿を付けてもよい。
- (×) 163. 男物甚平の袖には人形がつく。
- (○) 164. 友禅染は、江戸中期、宮崎友禅齋が創案したものといわれ、現在手描き友禅、型友禅などがある。
- (○) 165. 一越縮緬とは緯糸に左撚りと右撚りを交互に織り込んだもので、2本おきに織り込んだものを二越縮緬という。
- (×) 166. 次に挙げる名称はすべて格子縞のことをいう。
弁慶・市松・大名・業平・菊五郎・子持・三筋・吉野
- (×) 167. 着物や羽織の大きな袖丸は外に着るほど大きくするとよい。
- (×) 168. 和裁で使用されている手縫いの針で4の3とか、4の2という呼び方は、JISで規定された名称である。
- (○) 169. 小紋やお召の上でも女袴を着用すれば略礼装となる。
- (×) 170. 名古屋帯のポケットは、手先から標準寸法で2mの位置を中心として40cm位ポケット口をあける。
- (×) 171. 子供物の腰揚げは身長の半分の位置で折り、その山を腰揚げの山として揚げをする。
- (×) 172. 直線本縫いミシンは、家庭用と職業用に大別され、家庭用はカマが半回転式で、縫い速度は毎分6,000針程度である。
- (×) 173. 布地が裂けた場合や穴があいた場合にする補綴作業は、織り込みである。
- (×) 174. 女物の礼装用には、着物も帯も後染物が用いられる。
- (○) 175. 江戸小紋は、昭和になって名付けられた名称である。
- (○) 176. 柄裁ちをする場合、長着は上前の前身頃および胸にポイントをおき、羽織は後身頃にポイントをおく。

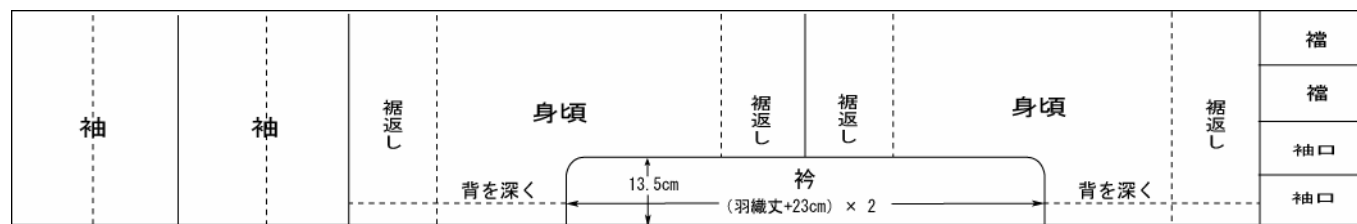
2. 次の問題について、その裁ち方を図解し、各部名称をよく分かるように記入しなさい。
また各部は寸法に応じて配分し、裁ち切るところを実線で示しなさい。

- ① 並幅物11m86cm (3尺1寸3分) の反物で五つ紋付の本裁女物長着を下記指定寸法で追い裁ちにしたい。
裁断図と紋の位置及び各部の寸法を書きなさい。
身丈背より出来上がり161cm (4尺2寸5分)、袖丈出来上がり49.3cm (1尺3寸)、繰越2cm (5分)
裾下出来上がり79.2cm (2尺1寸)、他標準寸法とする。
(注) 上前身頃・下前身頃・上前衿・上前共衿・上前衿裾・下前衿裾などの位置を書きなさい。

※衿肩明線は記入、未記入ともに正解



- ② 並幅6m (1丈5尺9寸) の表地を使用して女物羽織を作りたい。裁断図を書きなさい。(表地のみ)
ただし、衿寸法は62.5cm (1尺6寸5分) とする。



- ③ 大幅76cm (2尺)、長さ6.4m (1丈7尺) で男物長襦袢の裁断図を書きなさい。(表地のみ)

ハンドブック P50-3 P51 (2) ③の解答を参照

- ④ 並幅物8m (2丈1尺1寸) の反物で四つ身長着を作りたい。裁断図を書きなさい。

ハンドブック P175 ニ 四っ身を参照

- ⑤ 並幅物4m (1丈5寸) で一つ身長着を作りたい。裁断図を書きなさい。

ハンドブック P175 イ 一つ身を参照

- ⑥ 並幅物 12m (3丈1尺7寸) で本裁女物長襦袢を作りたい。裁断図を書きなさい。

ハンドブック P48 4 長襦袢の裁断図を参照

- ⑦ 並幅物裾廻し (八掛) 3.3m (8尺7寸位) の短尺の場合の裁断図を書きなさい。

ハンドブック P66 ⑤ の解答を参照

- ⑧ 並幅物 11.8m (3丈1尺2寸) で留袖用比翼を作りたい。裁断図を書きなさい。
ただし、袖は口、振とし、衿裏共布とする。

ハンドブック P126 問 (8) ① の解答を参照